

橋と土管と麦茶と新聞

★猪名川水系 一庫ダム 田尻川インレット

☆国崎せせらぎ広場

夜明けの水辺でポッパーをキャストする。

着水と同時に波紋が広がり、やがて水面が静かになるのを待ってポッピングを開始した。

「口が上がるまでが勝負や・・・ピッチ上げてストラクチャー周りに絞るか・・・」

もう直ぐお盆を迎える夏の日、一庫ダム国崎せせらぎ広場を通して田尻川のインレットでいつもながらのバスフィッシング・・・

この日の水位は程よく、遙か昔の記憶の彼方に残る国崎の集落辺りが現れていた。

「あの土管の前あたりやな・・・」

ワイドループで柔らかくポッパーを投げ、着水と同時にジャーク・・・ひったくる様に飛んで出た。

「よっしゃあ・・・なかなかのサイズや・・・」
幾度もルアーで痛い目に合っているのか、口周りがボロボロになっている40cmアップのバスをハンドライドして一息つける。

写真を撮ってリリースし、釣り下がるつもりで立ち上がると、いつもの様にあの日の記憶が蘇る。



それはまだこの国崎がダムに沈む前、私が中学生の頃・・・あの日も暑い夏の日だった。

「何処行く？生瀬（宝塚）？」

「あそこは街やし、めっちゃーゴミ多いし、

もっと山行こうや！・・・去年一庫の出合橋

でデッカイの釣れたやんけ・・・あそこが

「エエんちゃうか？」

「能勢かあ？・・・まあエエわ、そっ行こか・・・」

「川西能勢口」で阪急電車を降りて能勢電車

に乗り換える。「山下」までの切符を買ったつもり

が、誤って終点の「妙見口」まで切符を買って

しまった。

「うわーヤバ・・・間違っあつた！・・・お前も

終点まで買え！・・・今日は初谷川に行こー」

「・・・あほちゃうか？お前！・・・換えて

もあつてこいや！・・・」

「まあエエがな！・・・きっと初谷川が釣れるねんて！・・・暗示や暗示ー」

その頃の川釣りと言えばサバ虫を餌にしてオイカワやカワムツを釣る程度であるが、街中の中流域で釣れるオイカワよりも山辺で釣れるカワムツの方が何倍も価値が高かった。黒い側線が有ればニンマリと喜び、腹が赤くなった大型が釣れたら歓喜したのも今から思えば懐かしい。

終点の「妙見口」で降りて妙見山から流れ出る「初谷川」を釣り上げる。ところがこの日はべつ言う訳か5cm程度のチビばかりだった。

「見てみい・・・何が暗示じゃ！・・・

サッパリやんけ！・・・場所変えよう

や！・・・戻って出合橋に行こつやー」

「アホ言つなや、途中で降りたら帰りの電

車賃足りへんぞー」

「・・・ほな、どないすんねんー」

トピーカンの日差しを浴びながら、苛立ちを押しえて暫し考える。

「せやあー・・・歩こあー・・・ロープウェーを左に曲がったら一庫に居れるわー・・・昔、親父とドライブしてんー」

これが大きな間違いだった。体力を疑わない年頃は距離感も気にしない・・・おもむろに釣竿も仕舞わず、仕掛けをぶら下げたまま歩き出した。

妙見山ロープウェー黒川駅を反対方向に曲がり一庫を自指す。

しかし、歩けど歩けど・・・川に着かない。

炎天下の夏日に段々意識も虚ろになり水が飲みたくなってきた。

「めっちゃ喉渇いたなあ・・・自動販売機ないんかい？」

「アホ言うな！・・・あってもジュース買ったら、電車賃なくなるやんけー」

「まだなんか？」

「もうすぐやー・・・喋ったらゆけえ喉渇くやろーボケー」

「うるさいわい！・・・お前のせいやろー！ドアホー！・・・」

・・・と苛立ちはピークに達していた。

一時間程歩いたころ、漸く細い流れが見え始

め、田尻川との合流点「国崎」に着いた。

どちらからともなく、橋の上で立ち止まりあたりを見回した。・・・そこにお婆さんが通りかかった。

「すみません・・・ここに水道ないですか？」

「なにすんの？」



「喉渇いたんで水飲みたいんですー」

「どこから来たん？」

「妙見口から歩いて来ました。出合橋まで戻る途中です。」

「あんたら・・・この暑いのに帽子もかぶらんと・・・おばちゃんって、そこやサかい」

で待っとり・・・お茶持って来たあげるわー」
夏の太陽は容赦なくシリシリと照りつけ、相方は橋の欄干にもたれてへたり込んでいる。川に目をやると直ぐ横の土手に土管が埋めてあり、勢いよく川へ水を吐き出していた。

（あの水でも頭からかぶったるか？・・・）と半ばヤケクソ状態になっていた。

暫くすると、お婆さんは空っぽの一升瓶にコップかぶせ、新聞とヤカンを持って戻ってこられた。

「はい・・・麦茶やで・・・とコップを持たせてヤカンで注いでくれた。

礼を言う前に二人とも勢いよく飲み干しておかわりした。まさに「恵みのお茶」だった。

「あんたら、出合橋までまだだいぶあるでえ・・・この瓶にお茶入れといたげるわー・・・それとこの新聞で頭の日よけにしにいー」

「ありがとうございます。」

「あんたら釣りか？・・・ニコラはもう直ぐ
ダムに沈むさかい・・・しっかり今の内に釣
っとき・・・もうダムに沈んだら釣ること
も出来へんやろ・・・今のうちやで・・・」

「ダムで釣るんですか？」

「そうや・・・出合橋あたりにダムができて、

ニコラももう直ぐ沈むんや・・・私も近々
退かなあかん、沈んでもうたら住まれへん

さかいなあ（笑）・・・」

お婆さんは麦茶を空き瓶に入れると、新聞紙
と一緒に我々に持たせてくれた。

「ありがとうございます。」としか礼の言葉
を知らない中学生を、お婆さんは橋の上で見送
ってくれた。

少し下って振り向くと、橋の欄干に片手をつ
いて、笑いながら反対の手で「新聞を頭に乗せ
ろ！」と言う素振りをしている。

チョコンと頭を下げたまた暫く進み、もう一
度振り返ると、炎天下の橋の前には、もうお婆
は見受けせず、相変わらず土管だけが勢いよく
水を吐き出していた。

その土管・・・それに炎天下の橋の基礎部
分・・・今ではダムの底に沈み、夏の渇水の時
期にだけ水面上に現れる重要なバスのストラク
チャーである。

あの時頂いた麦茶の入った一升瓶はどこで

うしたか記憶が定かではないが、新聞は家まで
帽子になっていたことは覚えている。

あのお婆さん・・・「近々退かなあかん・・・」

と言う想いは簡単に片付けられる言葉ではなか
ったはずだが、中学生の私には普通の引越して
大差ない解釈だった。

あの頃で自分の祖母と同じお年にお見受け
したので、もはや往生されたかもしれない。

今でもこの国崎で釣り下がり、上流に振り
向き目を閉じると、笑いながら「新聞を頭に乗
せろ！」と言う素振りをされたお婆が記憶の彼
方から蘇る・・・ありがとうございます。



■猪名川一庫ダム国崎インレットの案内

ルアーでバスを狙って居る時は全く橋と土管
に気がつかず、単にバスのストラクチャーでし
かなかつた。フライで釣る様になったある夏の
日、水が完全に引いて記憶の彼方にある国崎が
現れた・・・とその時、堰を切った様にあの日
のことが蘇ってきた。

それからは水位がここまで下がり完全に記憶
に残る風景が現れると、あの立ち退きを迫られ
たお婆さんに申し訳ない思いが湧いて、とても
釣りをする気になれない。

5月の頃はせせらぎ広場の直ぐ下まで水があ
り、遊歩道も水没している。この頃は曇雲にキ
ャストしてもダメ・・・バスの気配をしっかりと捉
えて釣る必要がある。6月が過ぎ、7月の声を
聞くと遊歩道も現れて田尻川のインレットを釣
ることが出来る。一番フライで釣り易い水位は
水面上に橋跡の基礎部分とその近くにある土管
が水面直下にうっすら見える状態がよいと思う。
(つまりダムに沈む前の国崎が川が氾濫して洪
水になりかけた水位)

基本は#6のハードポッパーで狙っている。
個人的にバスバグは好みに合わず、バスバグを
使うならマラブームドラーなど#8ぐらいにサ
イズダウンするのが良いと思っている。

最近、濁りとアオコが多くなり以前程の釣果



は望めなくなってきた。

一番エキサイトしたのは十年程前だと思う。この頃は丁度ルアーにスレまくったころで、比較的サイズが小型で水面で勝負できるフライにはあつさりと出てくれた。やがてルアーマンが小さなルアーを使用し始めると#4ではダメで#6に落として今に至っている。

ここは青野ダムなどは異なり、シンキングで水面下を狙っても大した効果は望めないと思う。これまで最も多くのバスを上げたポイントでもあり、ブラックモントナでランカーを上げたこともあるが、沈めてもフローティングラインでシャローを引く程度で、殆ど水面で仕留めている。

その3割は浮いた見えバスをマラブームドラードで直撃する方法で、それ以外は、岸と平行に引くハードポッパーにいきなりガッ！と出るダイナマイトストライク・・・これを味わうとやっぱり刺激的でやめられない。

しかし、現在は見えバスも皆無に近く、バスの気配を昔感じることが出来ない時もあり、

日を間違えると極めて難しい釣り場になってしまった。

今でも真剣にバスを釣れ！と言われれば、仕方なくルアーを選択するだろう。そのくらいフライで釣るのは条件が整う必要がある。

但し、もし岸際にギルが湧きまくって沖合いの浮遊物の脇に見えバスが散見できれば、これは結構チャンスと言える。

#10ぐらいのマドラーミノーをやさしく見えバスにキャストすれば、簡単に銜え込んでくれるバス・・・と思っているが、いつ裏切られるかはわからない。

2006年

12月

